スペイン語 EN 否定の極性条件とその言語環境について

田林　洋一

0.　序

本稿ではスペイン語 EN 否定における極性を分析することを目的とする。本稿における「EN 否定」とは、以下の例文における否定表現を指す。

(1) a. En toda la tarde agarró una rata.
　　b. En tu vida has trabajado, Pedro.

Bruyne (1999)

(1) では否定辞 (palabras negativas) が現れていないが、意味的に否定極性 (polaridad negativa) を持つ。本稿では特に明記しない限り、EN 否定を「EN を伴う前置詞句の存在による、否定辞を伴わない否定」と定義する。

1.　先行研究

本節では Sánchez López (1999)、Linebarger (1991)、Ladusaw (1980)、奥野 (2002) を先行研究と位置づけ、諸々の問題点を指摘しながら EN 否定の極性について概観する。

1.1　先行研究における EN 否定の極性について

過去の研究で「EN 否定の極性」のみを扱った文献はほとんどない。基本的に EN 否定は主題化されるという特性を持つため、否定の作用域 (ámbito de la negación) は EN 前置詞句が c 統御[1]している、それより右側の部分全体であり、焦点は作用域内の語彙項目となる。更に、EN 否定は特殊な (Sánchez López に従えば「半ば語彙化された」) 否定表現であるため、メタ言語的な解釈も許さない。

従って、EN 否定では部分否定やメタ言語否定の解釈はありえず、文否定という解釈しかなされえない。本稿では専ら先行研究の立場を支持するが、EN 否定が文否定であ

---

[1]構成素統御 (c-command、以下 c 統御) は、Reinhart (1976) によって以下のように定義される。

(i) α、βいずれも他方を支配せず、かつαを支配する最初の枝分かれ節点がβを支配する時、節点αはβを c 統御する。

Reinhart (1976 : 32)

ることを自明とした上で、一般的な否定の極性と関連付けながら、EN 否定の極性を検討する。

1.2　否定極性研究の概略

Klima（1964）は、主に生成文法の枠組みから否定の問題を包括的に扱った最初の論文である。Klima の主張の一つとして、文否定と構成素否定を明確に区別した点があり、現在でも主要な否定研究の基盤となっている。

Klima は文否定と構成素否定を区別するために、深層構造で NEG という抽象的な要素が、文否定では文の前に、構成素否定では構成素の前に、それぞれ出現すると考えた。その際、肯定極性の環境にしか現れ得ない非確定的構成素が、否定極性項目（Negative Polarity Items、以下 NPI）に c 統御されると[2]、不定構成素編入変形（indefinite incorporation）を起こして NPI に変化する、と主張した。Klima の主張は以下の Reinhart（1983）のそれとほぼ同等である。

(2) ある要素 α の c 統御領域が、その作用域になる。

Reinhart（1983：13-14）

しかし、Jackendoff（1972）や太田（1980）が正しく指摘しているように、これだけでは否定極性を正しく捕らえていることにはならない。(3) は語彙レベルにおける Klima への反証である。

(3) a. I couldn't solve some of the problems.
　　b. I couldn't solve any of the problems.

加賀（1997：99）

(3) は共に適格な文であるが、非確定的構成素である some が NPI である any と同じ位置に生起している。そして、(3a) と (3b) の意味は異なる。形態レベルにおける反証は以下の文を参照。

---

[2] Klima の用語に従えば「構成を成す」（in construction with）であるが、この概念は c 統御とは鏡像関係にあたる。即ち、「α が β を c 統御する」とは、「β が α の構成を成す」ということである。

(4) a. That Jack ever slept is impossible.

b. *That Jack ever slept is possible.

Ross (1967 : 343ff)

(4a) の ever は否定の作用域内に来なければならないが、否定要素 impossible は ever を c 統御していない。更に、二重否定における反証も存在する。

(5) Not all sentences with double negatives are not grammatical.

McCawley (1973 : 282)

二重否定は深層構造では肯定極性を持ちうるため、(5) では否定に c 統御される要素が特定されない。統語レベルでの反証は以下の例文を参照。

(6) a. I didn't say that I had ever been to Israel.

b. *I didn't yell that I had ever been to Israel.

Linebarger (1980 : 24)

(6b) は、NPI である ever が not に c 統御されているにもかかわらず、容認されない。

以上のように、Klima の論は欠点こそ散見されるものの、現代の否定研究に繋がるところが多い。批判的な検証をした Jackendoff (1972) や Lasnik (1972) は、ほぼ Klima に準じての論議であるが、NPI に関しては例外的扱いを設けることが多く、画期的な進歩とは言えない。その後の否定研究で特筆すべきものは、生成文法からの枠組みでは太田 (1980)、論理的含意等の意味論からの枠組みでは Horn (1972) が挙げられよう。

Klima の貢献は、否定の作用域を統語的に決定したことである。その後、Progovac (1988) らが、否定の極性と作用域に関して同様に統語論の立場から様々な代替案を提示してきたが、Klima ほどの成果は挙げていない。

Klima や Lasnik、太田等の中心課題は否定の作用域の決定であり、結果として否定極性を自明のものとして認め、言語の統語構造と意味構造のインターフェイスを構築する試みとなっている。

1.3 Sánchez López（1999）における EN 否定の扱い

Sánchez López（1999）は、EN 否定を「半ば語彙化された表現であり、否定辞と同等の極性決定能力を持つ」としている。

(7) a. En {mi / la} vida he oído semejante disparate.
b. En todo Madrid se puede encontrar hombre más feliz que Pepe.
c. En toda la tarde fue capaz de decir nada coherente.

Sánchez López（1999：2603）

EN 前置詞句それ自体が否定辞として振舞っている根拠として、(7) には EN 前置詞句以外に否定辞と考えられうる語がなく、全体として否定極性を持つこと、(7c) に見られるように NPI の出現（nada）を認可すること等が挙げられる。更に EN 否定の特徴として、①時間的側面を意味する述語に限定される[3]、②EN 否定は非生産的で慣用句である、③前置詞 EN に導かれる要素は普遍的に量化子化された時間表現でなければならない、の三つを挙げている[4]。更に、EN 否定は時間的な極限（carácter extremo）と関連しているため、瞬間的な行為を表す文では EN 否定は生じず、en mi vida や en toda mi vida といった全体を指し示す前置詞句を要求する、と主張する。

Sánchez López の観察は、前置詞 EN の後に続く補語の条件等については洞察に富むが、時間表現だけに限定している点で不足がある（(7b) 参照）。また、EN 否定が語彙化された表現としてレキシコンに記載されている情報だとするならば、個々の EN 否定を許す前置詞句全てがレキシコンに記載されなければならず、言語の経済性の原理を破っている恐れがある。

1.4 Linebarger（1991）における極性の扱い

Linebarger（1991）は、否定の現象、特に NPI の分布に関して、主に論理形式からの説明を試みている。Linebarger の主張は、以下の二種類の直接作用域制約（Immediate Scope Constraint）に要約される。

---

[3] En toda la tarde estaba estudiando.は動詞 estudiar のアスペクト的特性のため、EN 否定にならない。Ibid：2604 参照。

[4] En veintitrés minutos fue capaz de decir nada coherente.は前置詞の補語の特性により EN 否定にならない。Ibid：2604 参照。

(8) 直接作用域制約（A）（ISC（A））：NPI は、論理形式において否定演算子 NEG の直接作用域内になければならない。

(9) 直接作用域制約（B）（ISC（B））：NPI を含む命題 p が別の命題 q を（論理的または語用論的に）含意し、その q の中で NPI が NOT の直接作用域内にあれば、p はその含意によって「救われ」、容認可能となる。

Linebarger における直接作用域とは、Reinhart（1983）とは異なり、以下のように純粋に論理形式からの定義となっている。

(10) ある要素 x は次の場合に NEG の直接作用域内にある。
a. x が NEG の作用域内にあり、かつ、
b. x と NEG の間に論理要素が介在していない。

まず、(8) と（10a）の妥当性を検証する。以下の文を参照。

(11) Este asunto no es moral para nadie.

Sánchez López（1999：2566）

(11) は以下のような論理形式を持つ。

(12) NOT（Este asunto es moral para nadie）

(12) は NPI である nadie が NOT の直接作用域内にあるので、適格となる。
(10b) は、作用域が複数の文にまたがる時に必要な条件である。以下の文を参照。

(13) El no se movió porque fue empujado.

(13) は曖昧であり、以下の二通りの読みを持つ。

(14) a. NOT CAUSE（él fue empujado, él se movió）
b. CAUSE（él fue empujado, NOT（él se movió））

(14a) は「彼が動いたのは、押されたからではない（別の理由である）」という、CAUSE が NOT の焦点になっている読みであり、(14b) は「彼が動かなかったのは、押されたからである」という、CAUSE が NOT の作用域外にある読みである[5]。更に以下の文を参照。

(15) El no movió un dedo porque fue empujado.

(15) も (13) 同様に二つの読みが論理的に可能である。

(16) a. NOT CAUSE (él fue empujado, él movió un dedo)
b. CAUSE (él fue empujado, NOT (él movió un dedo))

(16a) は「彼が少し動いたのは、押されたからではない（別の理由である）」という読みを論理形式で表したものであるが、(15) は (16a) の読みを許さず、(16b) の「彼が少しも動かなかったのは、押されたからである」という読みしか許さない。(16a) は、NOT と NPI である mover un dedo との間に論理演算子 (logical operator) である CAUSE が介在しているため、(10b) の制約を破っている。従って、NPI は NOT の直接作用域内にはないため、(16b) の解釈のみが残る。

ISC (B) が必要な理由は、以下のような文における NPI を説明するためである。

(17) a. There isn't anyone in this camp who wouldn't rather be in Montpelier.
b. I was surprised that she contributed a red cent.

(18) I had expected her not to contribute a red cent.

奥野 (2002 : 15-18)

---

[5] El no se movió porque fuera empujado.のように接続法になると、「押されたが、それが原因で動いたわけではない」という (14a) の読みしかなくなる。また、正確には El no se movió porque fue empujado.には三つの読みがある。一つは「彼が動かなかったのは、押されたからだ」であるが、残りの二つは「彼は押されたが、それが原因で動いたわけではない」という押されたことを認める解釈と「彼は動かなかったが、それはそもそも押されていないからだ」という押されたという事実がない場合である。従って、El no se movió porque fuera empujado.にも後者の二通りの解釈が存在することになる。

(17a) は否定語 not の直接作用域に肯定極性項目 (Positive Polarity Item) である would rather が出現しているため、ISC (A) に違反している。しかし、¬¬P≡P という論理式により、(17a) は、主節の動詞に生じた否定語 not と従属節に生じた否定語 not が存在するため二重否定になり、結果として肯定極性を持つ。更に、(17b) は語用論的含意として (18) を持つ。(18) では否定語 not の作用域内に NPI である red cent が出現しているので、ISC (B) により認可される。

ISC の問題点は、論理形式をそのまま自然言語に適用しているため、いわゆる語用論的な含意表現を無視することと、以下のような文に対応できないことである。

(19) a. *Todo el mundo mueve un dedo.
b. No hay nadie que no mueva un dedo.
(20) a. *I refused anything.
b. I didn't accept anything.

奥野 (2002 : 19)

(9) の含意計算に従うと、(19a) は (19b) を論理的に含意することになり、(19a) は非文にも関わらず ISC によって容認されてしまう。更に、(20a) における動詞 refused は、(17b) と (18) の間に見られる語用論的含意計算により、(20b) と解釈されるはずであるが、結果として非文になる。

(19) は構成素単位、(20) は動詞レベルでの Linebarger への反例であるが、畢竟 ISC における「ある命題の否定的含意」は無限に存在しうる。つまり、通常 NPI を認可しない言語表現であっても、語用論的含意計算の際に否定の要素が介在する可能性は常に存在するということである。従って、ISC (A) によって解決できなかった問題を ISC (B) を取り入れることで解決しようと試みたことにより、却って NPI 認可における説明力が落ちる結果となった。

1.5 Ladusaw (1980) における極性の扱い

Ladusaw (1980) は、下方含意仮説を提唱することにより、極性決定と NPI の認可条件を説明しようと考えた。下方含意仮説とは、以下のようにまとめられる。

(21) α is a trigger[6] for NPIs if α is downward-entailing.

Ladusaw (1980 : 147)

Ladusaw の述べる下方含意 (downward-entailing) とは、上位概念から下位概念への論理的な含意を指し、下方含意を許す環境を Monotonicity Decreasing (MD) と呼ぶ。従って、MD の言語表現では NPI の出現が認可されることになる。下方含意を許す表現とは、以下のような文である。

(22) a. Juan no es un hombre.
b. Juan no es un padre.

Juan が男性でないとすると、Juan は父親ではない。即ち、(22a) が真ならば (22b) は必ず真である。従って、(22a) は (22b) を論理的に含意する。そして、男性であるという上位概念から、父親であるという下位概念に向かって含意しているので、(22) の[SN no es x]は MD 環境、即ち NPI の出現を認可するということが出来る。

以上の議論を踏まえた上で、以下の文を検討する。

(23) a. No man is walking.
b. No father is walking.

(23a) という上位概念は (23b) という下位概念を含意するため、下方含意である。即ち、一人の男も歩いていないならば、一人の父親も歩いていないはずである。一方、一人の父親も歩いていないからといって、一人の男も歩いていないとは限らない (子供を持たない男が歩く可能性もあるからである)。従って、[No x VP] (x は名詞句) は MD 環境であり、NPI の出現を許す。

動詞レベルでも下方含意の概念は成立する。以下の文を参照。

(24) a. No man is walking.

---

[6] Trigger とは、もともと Jespersen (1917) の用語であり、否定極性誘因子 (Inductores de Polaridad Negativa) ないしは否定極性活性要素 (Activadores Negativos) が担う機能とほぼ同義である。なお、焦点因子と呼ばれることもあり術語が一定していないが、本質的な機能に大差はない。

b. No man is walking slowly.

男が誰も歩いていなければ、ゆっくり歩く男も必ずいないので、下方含意が成り立つ。一方、ゆっくり歩く男がいなくとも、男が誰も歩いていないとは言えない（せかせかと歩く男がいる可能性もある）。従って、[No NP x]（x は動詞句）は MD 環境であり、NPI の出現を許す。(23) と (24) の観察から、以下の文において NPI の出現が認可されると説明できる。

(25) a. No student who had ever read anything on phrenology attended the lectures.
b. No student who attended the lecture had ever read anything about phrenology.

Ladusaw (1980 : 149-150)

(25a) は名詞節内（No student who had ever read anything on phrenology）で、(25b) は動詞句内（had ever read anything about phrenology）で、それぞれ NPI（ever 及び anything）の出現を許す。

以上が下方含意仮説の大まかな主張だが、この仮説は論理形式から見た点で非常に大きい説得力を持っている。しかし、下方含意仮説の問題点として、二重否定やメタ言語否定に対応しきれないことが挙げられる。

(26) a. It is not the case that every boy swims.
b. It is not the case that every boy moves.

下方含意仮説によれば、(26b) は (26a) を含意する。即ち「全ての少年が動いているわけではない」のならば「全ての少年が泳いでいるわけではない」。従って、[it is not the case that NP x]（x は動詞句）は MD 環境であり、NPI の出現を認可してしまう。しかし、以下に見るように、NPI は生起されない。

(27) *It is not the case that every boy has any potatoes.

更に下方含意仮説では、従属節内の否定でも異なった予想をしてしまう。

(28) a. If you do not buy a Toyota, you'll be fired.

b. If you do not buy a Corolla, you'll be fired.

奥野（2002：45-46）

カローラを買わなければ首になるという状況（28b）では、トヨタ製の車を買わなければ首になる（28a）。つまり、トヨタ製の車を買わないということは、トヨタ製の車であるカローラも買わないことを意味する。従って（28b）でもトヨタ製の車を買わない人は首になる。このことから、(28b) は（28a）を含意し、結果として下方含意は成立しない[7]。つまり、下方含意仮説によると、[If NP not x]（x は動詞句）の環境において、NPI の生起を許さないことになる。しかし、下方含意仮説の予測とは異なり、[If NP not x]（x は動詞句）の環境で NPI は出現する。

(29) a. If John does not eat anything, he will be punished.

b. If there is not really any such constraint, why do so many sentences sound so odd?

奥野（2002：46）

下方含意仮説の問題点は以下のように集約される。即ち、ある否定語を伴わない環境が MD 環境で、NPI の出現を認可する場合、その環境に否定語が現れると下方含意を許さず、NPI の出現を認可しないという間違った予測をしてしまうことである。否定語を伴わない MD 環境は多岐に渡るため、結果として下方含意仮説は説明力を失う。

1.6 奥野（2002）における極性の扱い

奥野（2002）は Ladusaw（1980）の下方含意仮説の利点と問題点をそれぞれ正しく指摘し、その解決策として以下のような修正案を提示した。

(30) 含意計算の局所性条件[8]

---

[7] 下方含意が成立せず、上方含意が成立する環境を Monotonicity Increase（MI）環境と呼ぶが、本稿では触れない。詳しくは Ladusaw（1980）を参照。

[8] 含意計算の局所性条件は c 統御の概念に近い。奥野の主張は Ladusaw（1980）の枠組みで耐え切れなかった言語現象を説明するために c 統御の概念を援用したと考えら

a. monotonicity は、表層文ではなく、LF（論理形式）で決定される。
b. monotonicity は、当該 NPI から最も近い演算子によって決定される。

奥野（2002：47）

(30) の修正案に従えば、(27) の非文法性と (29) の文法性を説明できる。しかし、①論理的規定である下方含意仮説に論理形式を導入することの妥当性、②文により局所性条件が適用されうるかがアドホック、という問題点がある。特に②の問題は、下方含意仮説では[if NP x]という環境が NPI を生起することは容認するが、含意計算の局所性を導入すると、論理形式で[if NP x]ないしは[if NP not x]において NPI の出現を禁止してしまうことがある。

2 本論

2.1 命題否定とモダリティ否定の分割と QR

本稿では様々な極性決定条件から、Klima (1964) 及び中右 (1994) を基盤として、修正案を提示していきたい。まず、以下の文を参照。

(31) Frankly speaking, I don't think he is a nice person.

中右（1994）

中右の階層意味論によると、(31) の Frankly speaking は話者の心的態度、即ち発話態度を表し、I don't think は「私が考えない」ことは事実であるので、命題態度と規定され、中立命題を否定している[9]。なお、中右は命題否定の中に構成素否定及び語

れるが、「オッカムの剃刀」の知見から考えると、より説明原理の少ない c 統御のみでの解決を目指したほうが有益だと思われる。

[9]中右は、話者の心的態度を発話態度及び談話モダリティ（Discourse Modality)、命題に対する態度を命題態度及び文内モダリティ (Sentence Modality) と呼んでいるが、そもそも談話とは文の集合体を表すものであるため「心的モダリティ（Mental Modality)」とでも名づけた方がいいように思われる。なお「発話態度」という用語に問題はない。発話（utterance）は文でも単語単位でも行われるからである。

これに対して「文内モダリティ」という術語も問題がある。通常、文とは命題とモダリティの組み合わせであり、中右が主張するのはそのうちの命題に対する態度だけだからである。従って、「命題モダリティ（Propositional Modality)」とでも名づけた方がよい。なお、命題態度という術語に問題はない。

否定も組み込まれると主張する[10]。以下の文を参照する。

(32) a. I haven't done nothing.
b. John didn't not drink.

(32a) の haven't 及び (32b) の didn't は発話態度の否定に、(32a) の nothing 及び (32b) の not は命題態度の否定に対応し、論理構造は以下のようになる。

(33) a. NOT (I have done NOT (anything))
b. NOT (John not drink)

中右は二重否定文の論理構造を発話態度と命題態度に分けることで解決を図っている[11]。

本稿では、モダリティ否定と命題否定を考慮に入れた上で、再度 Klima (1964) の c 統御からの説明を試みる。その際、1.2 節で指摘した問題を解決するために、量化子の上昇 (Quantifier Raising、以下 QR) という操作を援用する[12]。QR はもともと量化子の作用域の問題を解決させるために May (1977) が提案し、Diesing (1992) らが採用した概念であり、以下のような現象である。

(34) Some boy loves every girl.

---

[10]語否定とは、imposible, inmoral, agramatical などの形態的要素 im-, in-, a- などを伴う語を指し、nada などの否定語とは区別される。

[11] (32) は口語的な表現であるため、文法性の判断が一義的ではないことが問題となる。場合によっては (32a) は否定と解釈されるからである。(32a) の文字通りのスペイン語訳である (i) を参照。

(i) No he hecho nada.

(i) の解釈は (32a) と異なり、二重否定ではない。これはスペイン語の NPI の特性及び否定の呼応に帰する要因であり、論理操作では解決できない。具体的な提案は Sánchez López (1999)、Bosque (1980) 他を参照。

[12] QR は A 移動でも A'移動でもない第三の移動形態であり、説明原理を減らすために A 移動のみで量化子を説明する試みもある (Hornstein, 1995 他参照)。もし A 移動のみで説明が可能であれば QR 操作を仮定する必要はなくなるが、Hornstein の論だけでは実際の言語現象にそぐわないことが多い。

(35) a. [some boy$_i$ [every girl$_j$ [t$_i$ loves t$_j$]]]
b. [every girl$_j$ [some boy$_i$ [t$_i$ loves t$_j$]]]

(34) は二つの意味を持つ。一つは (35a) で表されている解釈で「ある少年が全ての少女を愛している」(some>every) であり、もう一つは (35b) で表されている解釈で「少女一人ひとりに対して、その人を愛している少年が少なくとも一人はいる」(every>some) である。どちらの解釈をとるにしても、普遍量化子である some と全称量化子である every に QR の操作を適用することによって、その作用域を c 統御によって決定できる。即ち、(35a) は QR した some が every を c 統御し、(35b) は QR した every が some を c 統御しているため、それぞれの解釈が導き出される。

以上が QR の概観であるが、本稿では否定現象も QR 及び Klima の c 統御で説明する[13]。まず、語彙レベルでの問題点として挙げられた以下の文を検討する。

(36) a. I couldn't solve some of the problems. (= 3a)
b. I couldn't solve any of the problems. (= 3b)
(37) a. [IT IS THE CASE] [SOME$_i$ [NEG [I COULD SOLVE t$_i$ OF THE PROBLEMS]]
b. [IT IS NOT THE CASE] [SOME$_i$ [POS [I COULD SOLVE t$_i$ OF THE PROBLEMS]]

階層意味論と QR を併用すると、(36a) の couldn't は命題否定であり、some は couldn't の作用域に入らない解釈が可能である。つまり、概念構造は (37a) のようになり、否定演算子 NEG は SOME を作用域として取らない。一方、(36b) の couldn't はモダリティ否定であり、概念構造である (37b) の否定演算子 NOT は SOME を否定の作用域内に捕らえている。よって、some は論理形式を通じて any として表層で具現化される。

更に形態レベルの問題について検討する。以下を参照。

(38) a. That Jack ever slept is impossible. (= 4a)
b. *That Jack ever slept is possible. (= 4b)
(39) [IMPOSSIBLE$_i$ [POS [THAT JACK EVER SLEPT [IS t$_i$]]]]

---

[13] QR に対する批判的な検証として Hornstein (1995) 他を参照。

(38a) の impossible は語単位の命題否定であり、QR されて (39) の概念構造を持つ。すると、impossible は that 以下を c 統御しているため、NPI である ever の出現を認可する。一方、(38b) には否定要素を持つ語が存在しない。従って NPI の出現を認可できず、非文となる。

統語レベルの問題は、以下のような文であった。

(40) a. I didn't say that I had ever been to Israel. (= 6a)
b. *I didn't yell that I had ever been to Israel. (= 6b)

(40) の問題は統語レベルの問題に還元するよりも、動詞 say と yell の内在的意味特性に起因するように思われる。即ち、動詞 yell は「鋭く叫ぶ」や「大きな声で喋る」というように、伝達という事実の情報よりも、話者の様態や心的態度 (yell の場合は「大声で」や「鋭く」) が重要視される。つまり、小声で話した時やのんびりと話した時には、如何に情報が伝達されようとも yell とは呼べない。従って、(40b) は命題否定ではなくモダリティ否定であり、that 以下に否定の作用域が及ばないために NPI の出現を認可しない。しかし、(40a) の動詞 say は伝達という事実が重要視され、「どのように伝達したか」つまり話者の態度には興味がない。従って (40a) は命題否定となり、that 以下の ever を c 統御するため、NPI の出現を正しく認可する。

Klima の仮定を基にした前述の論を取り入れるならば、Ladusaw で問題になった下方含意仮説に関する付随的な条件 (30) は必要ない。また、論理形式からの説明を目指した Linebarger の ISC における問題も解決されうる。

次節以降では、上記の仮説を援用した上で EN 否定の極性決定条件について調べる。

2.2 EN 否定における極性決定条件とその環境

EN 否定についてはいくつかの研究があるが、その語用論的性格のためか、網羅的なものは少ない。本稿では Sánchez López の主張を基盤として、EN 否定の極性について概観する。なお、EN 否定の出現条件等については田林 (2006) 他を参照。

Sánchez López の定義によると、否定語は動詞に前置された時に否定極性を持ちうる語、即ち no の他に nadie、nunca、nada 等も含み、否定極性項目 (Término de Polaridad Negativa) は否定語が出現して否定環境になった言語表現に好んで現れる

表現、即ち pegar ojo や mover un dedo としている[14]。従って、EN 否定における EN 前置詞句は否定語句として扱われることになり、nada や nadie と同等の振る舞いを見せると期待される。

以下は EN 否定の極性について、複数のスペイン語ネイティブインフォーマント 12 名（スペイン出身 6 名、メキシコ出身 2 名、ペルー出身 2 名、チリ出身 1 名、パラグアイ出身 1 名）に（1）が否定極性を持つと確認した上で、極性のチェックを受けた結果である。前節の予想が正しければ、①EN 否定は EN 前置詞句が（必要ならば QR した結果）他のいずれかの要素を c 統御し、②c 統御された要素は命題否定とモダリティ否定のいずれかの意味で EN 否定の作用域になる、はずである[15]。出身国が同じネイティブにも極性判断に差が見られ、同一のインフォーマントでも極性判断が曖昧であったが、文脈はなるべく考慮に入れず、プロソディの影響を排除するため、紙媒体で提示し、判断が曖昧な場合はその旨指摘してもらい、肯定及び否定の判断をしてもらった[16]。

2.2.1　予想に従った EN 否定のケース

まず、田林が主張する「選択的前置詞句又は副詞句があると、EN 否定は生じない」と「EN 前置詞句は、広範な範囲を指し示す名詞句が後続しなければならない」という条件が適当かどうかを見るために、（40）を挙げる。

---

[14] この分類方法では、否定語 no とその他の否定語（tampoco、nada 等）との機能的差異が説明できない。従って、否定語にも二種類あり、①出現すると動詞の前置後置を問わずに単体で否定極性を持ちうる否定語（no、但し虚辞の否定は除く）と、②動詞に後置された時に義務的に動詞の前に他の否定語を要求する語（その他）を区別する必要があると思われる。更に、いわゆる最小量を表す NPI は他の NPI とは異なった振る舞いを見せることがある（詳しくは Fauconnier, 1975、Horn, 1989 他を参照）。本稿では、Fauconnier の主張する語用論的推論（pragmatic inference）を認め、最小量を示す言語表現は NPI になりうるという考え方を採る。

[15] EN 否定が発生するには、ほぼ義務的に EN 前置詞句を主題化させる必要があるため、QR の操作をする必要は余りないと思われる。なお、主題化と前置は区別する必要があるが、本稿では触れない。

[16] 中南米出身のインフォーマントは、全員が（1）の EN 否定の使用に関して疑問を投げかけた。そのため、ペルー出身 1 名、メキシコ出身 1 名、パラグアイ出身 1 名の下した極性判断チェックは取り入れなかった。一方、スペイン出身のインフォーマントは全員抵抗なく受け入れた。このことから、EN 否定は主にスペインで使用される表現だと思われる。

(40) a. *En toda la tarde agarró una rata todavía.

b. Al menos en tu vida has trabajado.

c. *A lo más en tu vida has trabajado.

d. A lo largo de toda tu vida has trabajado, Pedro.

e. Desde que nació hasta su muerte trabajó.

f. Toda mi vida he estudiado.

(40a) 及び (40c) は「理解が出来ない」「文法的におかしい」として全インフォーマントが容認しなかった。これは通常否定環境にしか出現しない todavía が選択的副詞句として出現しているため、EN 否定が生じる条件と抵触しているからだと考えられる。

(40b) は肯定とする解釈がほとんどであった。これは、肯定極性を好む al menos が出現したこと、また al menos は選択的副詞句であることが原因であり、正しく予想された。

(40d)、(40e) 及び (40f) のチェックは、EN 否定が「EN 前置詞句に後続する名詞句は広範な範囲を指し示す」ことが条件なら、果たして EN 否定を起こすのは「EN という前置詞の存在」なのか「広範な範囲を指し示す名詞句の存在」なのかを明らかにするためである。(40d)、(40e) 及び (40f) は全インフォーマントに肯定の解釈を受けた。従って、田林 (2006) の挙げた EN 否定出現の条件は「前置詞句 EN の存在を前提ないしは原因とした上で」のことであることが実証された。

なお、語用論的に全称的な表現が EN 前置詞句に後続しなければ EN 否定は生じないことを考えると、曖昧であった「広範」という表現は、むしろ「意味的・語用論的に全称的な表現」と考えた方が説明力が増すかもしれない。

更に以下の文を見る。

(41) a. Creo que en toda la tarde agarró una rata.

b. No creo que en toda la tarde agarrara una rata.

b'.? No creo que en toda la tarde agarró una rata.

c. En toda la tarde creo que agarró una rata.

EN 否定が従属節の位置に来た場合も極性に影響はなく、(41a) 及び (41b) の従属節内は否定の解釈を受けた。なお、(41b) については、従属節の否定語が主節に現れ

る、先行の否定（negación anticipada）の可能性も示唆されうるが、従属節が否定環境にあることに変わりはない[17]。なお、(41b') は非文という判断と、否定極性（午後の間、彼が一匹もネズミを捕まえないとは私は思わない）という解釈に二分された。また、(41c) は極性判断が話者によって曖昧であった。前節の仮定に従うならば、否定語である EN 前置詞句は主節以外の要素を全て c 統御しているのだから否定にならなければおかしい。これは主節の creo que が挿入句として存在し、EN 前置詞句と動詞の結びつきからなる否定の発生をいわばブロックしていると考えられる[18]。更に以下の文を参照。

(42) a. Si trabajo contigo, en toda la tarde agarraré una rata.
b. Si quieres ser un genio, en tu vida leeras los libros.
c. Cuando trabajaba contigo, en toda la tarde agarró una rata.

(42) は副詞節が付随した EN 否定の例である[19]。前節の予想通り、EN 前置詞句は主節の全ての要素を c 統御しているため、否定極性を持つと判断された。つまり、(42a)、(42b)、(42c) はそれぞれ「もしあなたと働いたら、午後の間私は一匹もネズミを捕まえられない」、「もし天才になりたければ、この本は読まないことだ」、「彼があなたと働いた時、午後の間一匹もネズミを捕まえられなかった」と解釈される。

2.2.2 予想と反したケース

ここまでは前節の仮定にほぼ従う結果が出たが、反するパターンが二つ生じた。それが以下の文である。

(43) a. En tu vida has trabajado en Japón.
b. En tu vida en Japón has trabajado.
c. En Japón en tu vida has trabajado.
(44) a. Si en toda la tarde agarró una rata, se fue.

---

17 先行の否定（negación anticipada）については Sánchez López（1999：2611）を参照。

18 このことから EN 否定は境界性の理論を持つ可能性が示唆されるが、本稿では言及しない。

19 語用論的な文脈をなるべく与えないために、si 節及び cuando 節には意味的に主節の極性判断に影響を及ぼさない文脈を選んだ。

b. Si en toda mi vida yo leo 1000 libros, seré un genio.

c. Si en toda mi vida yo leo 1000 libros, seré un tonto.

d. Cuando en toda la tarde agarró una rata, se fue.

(43) は選択的な前置詞句である en Japón が現れていることから肯定と予測されるはずであるが、全てのインフォーマントは否定と判断した。前節の仮説が間違った予測をした背景には「選択的前置詞句ないしは副詞句の存在」が EN 否定をブロックする強さと「NPI ((43) では意味的・語用論的に全称の名詞句が後続する EN 前置詞句) がその他の要素を c 統御する」ことから来る否定極性の強さが均一ではないためということが挙げられる ((43) では後者の方が強い)。

更に、(43) が否定の解釈をもつ理由として、以下の二つの可能性がある。一つめの可能性は以下の通りである。即ち、(43) の選択的前置詞句である en Japón は、動詞が要求したものではないという点で選択的である。しかし、en Japón それ自体は副詞 mucho 等と比較して、意味的に「動詞を修飾するわけではなく、文全体にかかる」と解釈する読みの方が自然であろう。つまり、(43) の意味構造は (45) のようになると考えられる。ここで指摘するべきは、[EN JAPON]の意味要素がそれ以外の命題と独立し、命題が成立したあとで付随的に存在しているということである。実際、(43) の全ての文は、en Japón をコンマで区切って挿入句的に独立させることが可能である。選択的副詞句の代表である mucho はコンマで区切って独立させることが出来ない。

(45) [EN JAPON] [+Tem: EN TU VIDA] *i* [HA SIDO EL CASO [POL [TU TRABAJAR]]] [+NEG trace*i*]

もう一つの可能性は、特に (43a) に言えることであるが、[EN JAPON]が選択的前置詞句 (即ち、省略しても非文にならない) ではあるが、意味的に動詞と緊密に結びついているために (46) のような意味構造を持っているという考え方である。

(46) [+Tem: EN TU VIDA] *i* [HA SIDO EL CASO [POL [TU TRABAJAR EN JAPON]]] [+NEG trace*i*]

つまり、en Japón は動詞が要求する参加者役割ではないが、語用論的に参加者役割と同程度の強さの結びつきがあるために、もはや付加詞とは捕らえられていないとい

うことである。

どちらの可能性を取るにせよ、ここでは「選択的前置詞句」の立ち位置が曖昧であることが問題となって起こっていることであり、前置詞句や副詞句の種類によってはEN否定を阻害しないケースもあるということである。

(44) は副詞節 (si節、cuando節) 内にEN否定が生じなかった例である。副詞節内ではNPIであるEN前置詞句がその他の要素をc統御しているため、否定極性を持たなければおかしい[20]。更に、田林 (2006 : (15)) が提唱したEN否定の統語的条件を守っているため、否定極性が現れると予想される。だが、予想に反して、インフォーマントごとに若干の揺れはあったが、(44) は肯定と判断された。この現象に対する決定的な反論は今後の課題とするが、考えられる原因としては、①特にif節内はNPIの出現を認可する (e.g. If Mary saw anyone, she will let us know.)、②副詞的接続詞のcuandoやsiは、既に副次的に動詞を修飾しているために「選択的な副詞節」(即ち動詞が要求しない意味要素) と判断され、EN否定の出現を認可しない、などが挙げられよう[21]。

3. 結語

本稿では、①Klima (1964) の主張を、様々な他の否定極性決定条件の研究と比較した上で再検討し一定の妥当性を見出すこと、②Klimaに修正を加えた理論がEN否定にどこまで有効か、を見た。否定の研究は膨大な数に上るため、Klimaよりも優れた理論がある可能性はあるが、その全てを網羅することは不可能であるし、また現実的でもない。本稿の意義は、EN否定を操作的に扱ったことであるが、EN否定は語用論的な要素に大きく左右されるため、本稿の考え方では説明できないところが多々ある。しかし、人為的にEN否定の例文を作成したために、インフォーマントが戸惑いを見せたところもあり、自然言語により近い操作的な試験が必要であろう。

今後の課題として、①否定極性の決定条件を更に詰める、②EN否定における語用論的な要素を明らかにする、③作為的でない方法論を構築する、④副詞節におけるEN否定の扱いを精緻に調べる、などが挙げられる。

---

20 (44b) 及び (44c) については、量化子の1000 librosが出現していることが原因かもしれないが、(44a) 及び (44d) も同様に肯定と解釈されるため、決定的な要因ではないと思われる。

21 ②の説を採用するならば、EN否定はcuando節やsi節といった副詞節内には発生しないことになる。コーパスでは副詞節内に発生したEN否定の例が見つからなかったことから、②の説が有力であるが、決定的な論証ではない。

参考文献

Bruyne de, J (1999) *Las preposiciones, Gramática Descriptiva de la Lengua Española.* 1 vol. 657-703. ESPASA.

Diesing, M (1992) *Indefinites.* MIT Press.

Fauconnier, G (1975) *Polarity and the Scale Principle.* CLS 11, 188-199.

Horn, L (1972) *On the Semantic Properties of Logical Operators in English.* University of California.

Hornstein, N (1995) *Logical Form: From GB to Minimalism.* Blackwell.

Jackendoff, R (1972) *Semantic Interpretation in Generative Grammar.* MIT Press.

Jespersen, O (1917) *Negation in English and Other Languages.* Københaun.

加賀信広 (1997)「数量詞と部分否定」『指示と照応と否定』研究社。

Klima, E, S (1964a) *Negation in English. In the structureof language: Readings in the Philosophy of Language*, ed. Jerry, A, Forder & Jerrold, J, K. 246-323. Englewood Cliffs, New Jersey: Prentice-Hall, Inc.

Ladusaw, W, A (1980a) *Polarity Sensitivity as Inherent Scope Relations.* Garland Publishing.

Langacker, R, W (1969a) *On Pronominalization and the Chain of Command. Modern Studies in English: Readings in Transformational Grammar.* Englewood Cliffs, N.J. Prentice-Hall, Inc.

Lasnik, H (1972) *Analyses of Negation in English.* MIT Press.

Linebarger, M, C (1980) *The Grammar of Negative Polarity.* MIT Press.

Linebarger, M, C (1991) *Negative Polarity as Linguistic Evidence.* CLS 27: Part 2, 165-188.

May, R (1977) *The Grammar of Quantification.* MIT Press.

McCawley, J, D (1973a) *Grammar and Meaning: Papers on Syntactic and Semantic Topics.* Taishukan.

中右実 (1994)『認知意味論の原理』大修館書店。

奥野忠徳 (2002)「極性」『極性と作用域』研究社。

大塚高信他編 (1982)『新英語学辞典』研究社。

太田朗 (1980)『否定の意味-意味論序説』大修館書店。

Progovac, L (1988) *A Binding Approach to Polarity Sensitivity.* University of

Southern California.

Reinhart, T (1976b) *The Syntactic Domain of Anaphora.* MIT Press.

Reinhart, T (1983) *Coreference and Bound Anaphora: A Restatement of the Anaphora Questions. Linguistics and Philosophy,* Vol. 6.

Ross, J, R (1967a) *Constraints on Variables in Syntax.* MIT Press.

Sánchez López, C. (1999) *La Negación; Gramática Descriptiva de la Lengua Española.* 2 vol. 2561-2634. ESPASA.

田林洋一 (2006)「スペイン語前置詞 EN における概念構造の試案」『スペイン語学研究』vol.21. 東京スペイン語学研究会。

Consideración sobre la condición de la polaridad de la negación con EN en español y su entorno lingüístico

Yoichi Tabayashi

El presente estudio trata una peculiar forma de construcción negativa observada en español, que utiliza la preposición EN, con una especial atención a las condiciones de aparición de la negación con EN sin palabra negativa.

Primero, se reseñan y se critican los análisis de Sánchez López (1999), Linebarger (1991), Ladusaw (1980) y de Okuno (2002). Esta parte tiene por objeto investigar y presenter la fórmula del ámbito de la negación según Klima (1964) y Nakau (1994), donde el autor propone que puede identificar el ámbito de la negación sirviéndose de la idea de *C-Command* y de *Quantifier Raising* (QR).

Segundo, se investiga la distribución de la polaridad de la negación con EN a través de una encuesta. El resultado indica que la mayoría de las negaciones con EN obedecen a la teoría de *C-Command* y QR, aunque hay dos tipos de contraejemplos: uno de las propocisiones con preposición locativa y otros concernientos a los entornos de la conjunción adverbial.

Se concluye que la negación con EN no se puede tratar sólo dentro del marco de la semántica, sino que es necesario un punto de vista pragmático. Se espera que futuras investigaciones aclararán las condiciones semánticas, sintácticas y pragmáticas con más detalle.